

実践報告

地域に根ざす 総合学習をめざして

亀岡高校「日本文化コース」の取り組みから

京都府立亀岡高等学校

伊澤ひとみ・岡田晃治・長谷川澄夫

1. 亀岡高校・日本文化コースについて

京都の府立高校においては特色ある教育活動をするめることを目的に各校に多様な「コース」が設置されてきた。本校においても「日本の固有文化を深く理解し、21世紀に生きる有為な国際人育成を目指す」目的を掲げて日本文化コースが設置された。「進学のための特別な講座にはしない」ということを申し合わせ、手探りのなかで1997年から7年間取り組みをすすめてきた。

本校の3学年は普通科11クラスからなり、Ⅰ類（標準）7クラス・Ⅱ類（学力伸長）2クラス・Ⅲ類（芸術系）1クラスが設置されている（2001年度入学生）。日本文化コースは、3学年Ⅰ類文系の生徒たちの選択コースとして設置されている。登録生徒の人数によって年度によってクラス授業となったり選択講座となるが、「学校設定科目」として下記の3講座が設けられた。リーディングは文系のクラスより1単位増とした。

- ①「地域・文化研究」（2単位）は、校外学習（フィールドワーク）を学習の柱として位置づけ、地域に根ざした総合学習のあり方を模索してきた。
- ②「日本史研究」（2単位）は、基礎的な学力として「読む力」・「書く力」の育成をはかり、さらに「まとめる力」・「考える力」・「発表する力」の育成につとめ卒業レポートの作成を目標に取り組んだ。
- ③「日本文学研究」（2単位）は「韻文学」の学習をテーマに、従来の講義形式を踏襲しつつ、俳句

の鑑賞・創作というテーマ学習を深めてきた。

- ④「リーディング」（3+1単位）は校外学習などと連携して、新しい学習のあり方を模索した。

社会科を基礎とした①と②の2つの科目は、時間割の面でも連続授業となるように工夫して連携をはかり、複数の担当でチームティーチングの体制をとり協力して取り組みを進めた。

2. 日本文化コースの学習の取り組み

日本文化コースの取り組みのなかから、社会科に基礎をおいた科目の取り組みの特徴について簡単に振り返ってみる。

（1）校外学習（フィールドワーク）

「地域・文化研究」の授業では、保津川下りの体験をはじめとした身近な亀岡の地域の学習や京都の歴史遺産の見学をおこない、生徒たちが歴史に親しむ良い機会となった。留学経験のある生徒が、外国の人は自国の歴史や文化を良く理解しているのに対して、私たちは「日本のこと、郷土のことをあまりに知らない」と語ったことがある。京都というすぐれた文化遺産が身近にある条件を活かし、生徒たちが「本物」を見たり、体験したりすることの出来る学習をおこなうことができた。どの取り組みにも生徒たちは一様に「楽しかった」との声をよせ、その後のレポートづくりのテーマとして学習を深めることができた。03年度の校外学習は以下の取り組みをおこなった。

亀岡史跡（古墳など）見学／保津川下りと嵯峨野めぐり・トロッコ列車／葵祭・京都文化博物館見学／亀山城下町について講演と巡見／亀岡市文化資料館見学／祇園祭（山建て、宵々山見学、巡行参加「油天神山」曳き手ボランティアとして）／園部文化博物館（列島展）見学／奈良（平城宮跡・法隆寺）見学／亀岡祭（宵山見学、巡行参加）／発掘見学と体験学習（河原尻遺跡）／西本願寺御影堂解体修理工事と書院見学／立命館大学国際平和ミュージアムと金閣寺・龍安寺見学

（2）卒業レポートの作成

「日本史研究」の授業では「読む」「書く」「考える」という基礎的な力を育成するために、テキスト

3年 日本文化カリキュラム

現代文	古典Ⅱ	日本文学研究	世界史B	日本史研究	日本史B	地域文化研究	体育	リーディング	ライティング	HR
(3)	(3)	(2)	(2)	(2)	(5)	(2)	(3)	(4)	(3)	(1)



2003. 5 保津川下り

(山川出版社『京都府の歴史』)やブックレット・新書を読む時間を設けた。フィールドワークをもとに、生徒たちは各自のレポートのテーマを深め、単に図書資料のみでなく、アンケート調査や資料館をはじめとした諸機関や地域の人々に聞き取りをおこなって学習を深めた。生徒それぞれが自由な研究課題を設定し、そのテーマにそって3～4人のグループをつくり、原稿用紙約20枚の卒業レポートを課した。大学生との合同ゼミの体験をふまえて予備発表をおこない、パソコン入力によって原稿を作成した。レポートの作成は「難しい」「しんどかった」という反面、「本当の勉強をしたと思う」との声がよせられ、年度の終わりに卒業レポート集を『久遠の知』（校歌の一節）と題して刊行してきた。生徒たちの興味や能力には優れたものがあり、ペーパーのレポートに変えて、「モノ」で作る歴史模型制作に取り組むグループもあらわれ、紙芝居やマンガ、ホームページ作成など多様な学習発表がうまれた。

(3) 歴史模型の制作について

ペーパーのレポートのかわりに、「実物」の歴史模型を制作するグループが毎年のようにうまれた。取り組みの姿勢や出来映えに精粗はあるが、いずれのグループも「熱心に」「楽しく」取り組むことができた。生徒たちは自分たちの手で作り上げた模型を通して古墳や城など、地域の歴史をよりヴィジュアルに学習するとともに、学習の成果を「目に見える形」で発表することができた。教師の方も模型づくりを通して、生徒たちの自由な発想やパワーに学ぶところが多かった。模型づくりを通して「共に学ぶよろこび」「作るよろこび」を味わうことができたように思う。生徒諸君とともに下記のような歴史模型を制作してきた。

1. 亀山城下町の復元模型（縮尺1／700, 98年



2003. 7 祇園祭

度・女子6人)

2. 亀山城天守復元模型（縮尺1／38, 99年度・女子3人)
3. 保津峡の地形模型（縮尺1／25000, 99年度・男子4人／00年度・男子3人／01年度・8人)
4. 亀岡駅の模型（縮尺1／150, 99年度・男子3人／02年度・男子2人)
5. 保津車塚古墳の復元模型（縮尺1／100, 02年度・男子2人)
6. 亀岡高等学校の復元模型（縮尺1／150, 02年度・女子2人)
7. 亀山城天守外観の復元模型（縮尺1／38, 03年度・男子3人)
8. 丹波国分寺伽藍復元模型（縮尺1／200, 03年度・男子4人)

なおこれらの作品は亀岡市文化資料館に寄贈し市民の観覧に供している。

3. 地域に学ぶ取り組み

日本文化コースでは取り組みの柱のひとつとして様々な校外学習を実施してきた。校外学習の柱として身近な「地域」(京都や亀岡の地域の歴史や文化)を位置づけ、学習にあたっては、地域の歴史遺産(埋蔵文化財や古社寺)の見学とあわせ、資料館をはじめとした地域の社会教育機関や大学との連携を重視してすすめてきた。その連携のあり方について気づいた点をまとめてみる。

(1) 資料館の見学

日本文化コースでは年度によって異なるが、京都文化博物館・京都国立博物館・立命館大学国際平和ミュージアムをはじめ多くの博物館や資料館の見学を実施し、学芸員の方やボランティアガイドの方にお世話になった。とりわけ学校から10分の所に位

いた。大学生との交流授業を体験した成果はレポートの中間発表の刺激となり、レポートに活かすことができた。

高校と大学の連携事業はキャンパス見学や「出前講義」など多彩な企画が催されているが、大学進学にむけての目的に限ることなく、大学と高校の学生・生徒や教師がお互いに教育（研究）内容にかかわっても連携することができれば、今後の教育活動にとって双方に大きな刺激となるのではないだろうか。大学生と高校生の学力水準や教育目標には隔たりがあっても、共同学習をおこなうことによって双方の教育活動に刺激を与えあうことができればと思う。

4. さいごに

以上、7年間の日本文化コースの取り組みを概観してみた。校外学習をもとにレポートを作成する学習方法はとりたてて目をひくものではない。「班による調べ学習」や「卒業レポートの作成」についても豊富な実践があり、日本文化コースではこれらに学んだ取り組みを行ったにすぎない。「学力の低下」や「学びからの逃避」が論じられ、生徒の意欲・興味・関心を引き出す授業方法が求められているが、7年間の学習を通じて生徒たちは一様に「楽しかった」「これが本当の勉強だった」との声を寄せてくれている。最初のフィールドワークとして保津川下りを体験することからはじめて、多彩な行事を企画することによって、生徒たちは楽しく学ぶことができたのであろう。そして「楽しさ」のみに終わらせることなく、祇園祭や亀岡祭への参加をとおして地域の人々との交流を深め、そして最後のレポートづくりを通しての学習の充実感を、「苦しい」けれど「本当の勉強をした」と答えてくれている。

この間の取り組みの中で気づいた点をまとめてみると

①できるだけ講義形式の授業からはなれ、学習の「自由な時間」と「空間のひろがり」の保障につとめることによって、多くの生徒たちに歓迎されたものと思う。事前の工夫や準備に手間どることもあったが、「新しい科目（学校設定科目）」として担当者に「自由な裁量」が認められることによって「楽しく」取り組むことができた。コース独自の予算や定員が配当されたことはなかったが、

チームティーチングができるよう一定の時間割の工夫や援助をいただくとともに、チームワークの連携がとれたから可能になったものと考ええる。

②フィールドワークを学習の柱としてすすめるなかで、資料館や大学との連携の重要性にあらためて気づくとともに、学校とそれらとの新しい連携のあり方を模索することができた。単なる見学者・訪問者ではなく、生徒たち（学校）が主体的に地域の事業や活動に参加する途をひらくことによって、学校（授業）にとっても、諸機関にとってもその学習活動を活性化していくことができるのではないかと思う。

③フィールドワークをとおして、遺跡の見学や発掘体験・地域の取り組みへの参加など、自らの地域をあらためて認識し学習する機会となった。地域の人々の暮らしぶりや文化財担当の方々の仕事に接し、文化財愛護の精神を培うとともに、学校（生徒・教員）と地域（住民・資料館・大学など）の学びのネットワークのひろがりをさまざまな形でつくることができたと願っている。

④卒業レポートの作成など年間の取り組みを通して生徒たちが自主的に学び・考える姿勢を身につけるように心がけ、個々のとりくみの都度レポートや感想文の提出をもって評価をおこなってきた。そして卒業レポートの作成という「目に見える形で評価」をこころみた。「読む」・「書く」・「数える」基礎的な学力の上になつて、レポートづくりをとおして「考える」・「表現する」力を身につけさせることができればと考える。地域活動への参加・聞き取り調査・プレゼンテーション・レポートづくりなど、「学力」とはなにかをあらためて考える機会となった。

以上、日本文化コースのあらましを述べてみた。本コースの取り組みは当初から系統だった目標や計画を立てていたわけではなかったが、生徒たちとともに学ぶなかで「地域に根ざした総合学習」のあり方を模索していたように思う。新しいカリキュラムのもとで「総合的な学習の時間」が本格的に実施されるようになった現在、そのための一つの参考になればと願っている。